

## フロイトの『夢判断』について

川 東 雅 樹

## Über die Ich-Struktur von Freuds "Traumdeutung"

Masaki KAWAHIGASHI

## Zusammenfassung

Die Unverständlichkeit der erinnerten Träume begreift Freud als psychologisch notwendiges, falsches Bewusstsein, als Produkt von Zensur. Lässt man um die Sinnfragmente des manifesten Traum Inhalts freie Assoziationen sich kristallisieren, so enthüllt sich nicht nur die ursprüngliche Bedeutung der Traumelemente, sondern zugleich die Arbeitsweise der psychologischen Zensur: "die Traumarbeit". Damit die Traumdeutung detektivisch diese Traumarbeit rückgängig machen kann, müssen paradoxerweise die Träume so vernünftig entstellt werden. Denn es ist gerade das bewusste Ich, das sie zu interpretieren versucht, d.h. die psychische Instanz, die repräsentiert, was man Vernunft und Besonnenheit nennen.

Während die Bedeutung der Träume zwar im Erwachen diskursiv schwer zu erfassen ist, weil sie sich eigentlich nicht auf das bewusste Ich richten, kann der Traumer doch wenigstens im Schlafen seinen Traum so lebendig wie die sogenannte Wirklichkeit wahrnehmen. Daraus lässt sich durch das Traumen ein Aufbau des seelischen Apparats ahnen, der auch die rätselhafte Welt als solche in den nicht-diskursiven Symbolismus aufnimmt.

『夢判断』(1900)はフロイトが自分の最も重要な著作のひとつであることを認めた仕事で、事実またその後の精神分析研究の方向を決定づける一歩であったことは間違いない。しかしもともとフロイトの革命的業績の出発点となったのはヒステリー研究であった。十九世紀後半の「治療ニヒリズム」<sup>1)</sup>の支配するウィーンではヒステリー症状はその原因が身体的にも解剖学的にも確かめられないためにまともに取りあげられることがなかったが、それを心因的に探ることがはじまりだった。目に見える原因のない、原理としては誰にでも確認できるような原因が見つからない病気の根元を突き止めること、しかもそれを科学的手続きを経て行うこと、これがフロイトが自らに課した課題であった。初めから精神分析という学問が抱えている方法論上のジレンマに直面していたといえるだろう。

\*

フロイトがヒステリー研究において原因を心的なものに求める契機はふたつあった。ひとつは当時、留学先のバリのサルベトリエール病院でヒステリー研究の第一人者シャルコーの着眼と手法、つまり、症状があるなら病気がある、という見解と、またそれを証明するのに用いた催眠術に接したこと。もうひとつ、そしてこちらの方が重要なのだが、友人のヨーゼフ・ブロイアー報告する

女性のヒステリー患者の症状である。いわゆる「アンナ・Oの症例」である。ブロイアーは患者のアンナと共同作業のような形で、彼女がヒステリーの徴候をきたすきっかけになった出来事を言葉に表現していく。そもそもこの出来事を彼女自身は忘れてしまっており、またそれが自分の病状と関わりがあるとは気づいていない。しかしその出来事に対して抱いた感情の記憶をいとぐちにし、ブロイアーの助けを借りて、意識化し、言語化することで、病状が軽減する効果を得る。言葉となって意識に上ったとたんに症状が解消されるというわけで、アンナ自身が「煙突掃除」と名付けたものである。ここで問題になるのは、かりにフロイトやブロイアーが主張するように、患者が意識的に語ることによって、結果として神経症が軽減されたとしても、病気の徴候とその動機とされる出来事との関係が確認されたわけではないことだ。くだんの出来事にともなう感情、つまり観念が実際の徴候という現実の出来事に直結するとは言い切れないのである。

精神分析がなによりもまず治療行為であることは明白だが、同時にそれが科学的認識に基づくものであるとフロイトはたびたび主張する。しかし一般論として、科学性を成り立たせるには通常次の二点の条件が満たされなければならない。ひとつは原則として誰にでも原因と結果を事実として確認できることであり、もうひとつはあ

る出来事から次の出来事への予測を可能とすることだ。〈ある事実〉に対して不快や恐怖を感じて、それが後に神経症を引き起こすという推論において、我々が確認できるのは〈ある事実〉だけであり、その事実に対する当事者の感情は検証できない。彼なり彼女なりがそのように証言するから認めるという次元のものである。しかし神経症の原因は〈ある事実〉ではなく、まさにそのときに抱いた感情であり、言い換えれば本人がそのように感じたということが事実なのである。そしてこの事実を第三者は確認するすべがない。フロイト自身後に客観的事実よりも心的事実を重視する姿勢に転じることになり、例えば幼児期の性的トラウマをめぐる見解を修正している。幼児期に被った性的虐待や近親相姦の衝撃がトラウマとして後々まで深くその人物の行動に影響を与え、しばしば神経症として傷を残すという主張をフロイトは展開するのだが、後に自分の診てきた患者たちの語った虐待や衝撃的体験の多くが実はフィクションであることが判明すると、事件そのものではなく、そのような体験を得たと信じていることに焦点を移し、なぜ多くの神経症患者たちが幼児期の性的体験という幻想にとらわれるのかという問題を注視する。そこから得られた成果がエディプス・コンプレックスである。そのような結果があったにしても、心的事実がいわゆる科学的検証に耐えられる事実であるかどうかはまだ曖昧なままである。

夢もまた同じ議論にさらされる。夢の解釈が科学性の衣装をまとうとき、つねに対象性が問題になる。夢は夢見る人間がかかわることのできない、すなわち無意識が圧倒的に支配する現象であって、それだからこそ科学的認識の対象になりうるものとしたら、夢の舞台あるいは創造者としての一個の人間の意志だとか欲求あるいは反応はどこまで主体的であり得るのか。もともと夢を他者はのぞくことができない。夢を他人が実況中継することもできなければ、観察することもできない。誰かが夢を見ていることを知るには、彼の目を覚まさせ、夢を見ていたかどうかを確認し、そしてその内容を聞き出す以外の方法はない。しかし聞き出すといっても夢見た本人がそれこそ実況中継することもかなわず、ただ見た夢を語る、それも思い出すという手続きを踏むしかない。夢が事実かどうかという問題に絞れば、これだけでも十分に幾通りものフィルターが間に介在していることははっきりしている。にもかかわらずフロイトは経験的には一人の人間のみにかかわる主観的なものをあたかも客体のようにして取り扱うことによって、自然科学の立場からの批判を何とかしてくい止めようとする。彼は神経症治療において、患者の本来とらえどころのない生の有り様を強制的とも言える言語的秩序の枠のなかに捉える。そしてこれがあなたの人生であり、あなたの心の一部始

終だと独断にも似た解釈を下しているにもかかわらず、客観主義的な判断を下しているのだというスタンスをけっして崩さない。科学的であることへのフロイトのかたくななこだわりは、おそらく当時彼を取り巻いていたウィーンの学会の動向、風潮そしてそれに見合う处世術という観点から説明する事もできるかも知れない。しかしそれよりももっと関心を引くのは、フロイトが向き合わざるを得なかったこの事象の対象性と個人の内的空間の曖昧な関係そのものがもっている創造性である。ルネサンス以降の科学的思考やデカルト以後のヨーロッパ近代の認識哲学の行き詰まりと新たな知のあり方への胎動が、ニーチェやマルクスそしてソシュールなどが独自に切り開いた世界で生じたのと同様に、世紀末ウィーンという希有の時代思潮のなかで、無意識という不可解な領域を舞台に始まっていたのである。

\*

夢がひとつの体験であり、夢の内容もまた事実であることは間違いない。ただその内容を夢を見た本人以外の誰も体験できないという点で通常言う事実とは性格を異にする。共有空間をもっていないということである。それではやはり夢は事実ではないのか。いわゆる実際の体験と夢の体験は分かちものは何なのか。たとえば夢のなかで見たことと覚醒時に自分以外に他に誰もいないところで見た現実とは、体験の質において、第三者にとって差があるだろうか。その内容が荒唐無稽であろうと、あるいはいかにもありそうなことであろうと第三者にはいずれの場合も当事者が情景を描写すること、物語ることによってしか伝達されようのないものであることに変わりはない。さらにいえば現実の体験のレベルでも、複数の人間が同じ光景を見聞したところで、厳密に考えれば必ずしも同じ体験をしたとはいえない。それぞれが抱える過去や性格、能力に応じて眼前の出来事を独自に解釈するのはきわめて自然である。体験というものがそもそも個人的なものと規定すれば夢と現実の体験を区別するのはない。そればかりかユングの言うように逆に共通に見る夢だって考えられるのである。

それにもかかわらず現実の体験と夢のそれとは決定的に性質を異にするものであることは誰もが直感的に知っている。それぞれの事象を生む母体の違いが理由のひとつに挙げられるである。夢を生産するのは個人の内的な空間である。自己という内部空間のなかで繰り広げられる出来事であって、いわゆる現実とは決定的に違う。次にその夢を体験する主体について考えるなら、体験という次元ではすでに述べたように、夢と覚醒時の現実の差はないのだが、ただひとつ大きな隔たりがある。それは夢見る人は夢に対して行動を起こせないということだ。夢が自然科学が対象とするような現象であって、いわば

単なる肉体的、生理的な現象なら夢を解釈して個人の内面の分析に貢献するという方法そのものが意味をなさなくなる。しかしそうだからといって、われわれ自身が自らの夢に積極的に反応し、それに参加し行動を起こすという類のものではないことは自明で、その意味では人文科学の範疇にはいるとは簡単に断定できるものでもない。つまりわれわれは自分自身の夢にどのような関係にあるのかという問いかけざるをえないのだ。

「夢を見る」はドイツ語では“träumen”，英語では“dream”で、いずれも「だます」「幻惑する」という意味に遡ることができ、この現象がもっている現実感覚との落差を強調している。日本語の「夢を見る」という表現は別の位相から夢の厄介な仕組みを露出させることになる。「私は夢を見る」というとき、ここで見られている夢は誰の夢かと問えば、もちろんそれは「私の夢」である。そしてそこでは夢は行為ではなく、名詞的な対象としてとらえられている。<sup>2)</sup>「見る」という行為が本来見るものと見られるものの間の距離を前提とする限り、それは見るものとしての「私」という主体と見られるものとしての「私の夢」という客体が対峙する二元構造を必然的に派生する。同一の人間の中で生じる出来事が、その人間を分裂させるのである。もちろんこれは本来は分割不可能な出来事を、「夢を・見る」というふうに言語に分節化することによって生じた分裂にすぎないと考えることもできる。ちょうど馬が走る光景を、「馬」という物体と「走る」という動きに分割できないのと同じことで、言語の暴力的な文法が認識の方法そのものを決定する例だともいえる。しかしそうだとするとわれわれの日常経験する夢は確かに視覚的な印象に依存することがほとんどで、われわれはある場面を観察することもあれば、あるいは役者のように演じながらひとつの舞台を動き回ることもあるのだが、いずれにしても周りを見ている自分というものを実感していることは確かである。見る〈主体〉、自分以外のものを知覚し、意識する〈主体〉という感覚を簡単には放棄することができないのである。そしてこの〈主体〉は自己という統一体として自覚されてきた。これはただ単に自己というものが統一体として定義されてきたという言語の問題だけに収まらないもので、普通の人間でも瞬間的にはたとえばボードレールのいう万物照応に似た自我の拡張感や融解感を体験できないものでもないが、そういう詩的な恍惚状態は例外で、この統一感はやはり相当強固な実感なのである。分裂する自己という命題などあらためて取りあげるほどのものでもないかもしれない。それでもやはり銘記しておかなければならないことは、夢のなかでのこととはいえ、一個の統一体の内部で起きることは隅々まで分かっているのだという幻想が崩れ落ちるときに、自己という統一

体の根拠もまた危うくなるということだ。見られるものとしての夢が不可解で、覚醒時の理解能力の限界を超えていることと、それがほかならぬ自分が産出したのだという事実のはざままで自己の統一感はあやしくなる。

意識しうるものは自己の一部でしかなく、自分は自分を知らないという発想は、無意識という概念を導入するのに好都合であり、フロイトが素材にした夢はそのための格好の媒体なのである。いうまでもなくフロイトの考えていた無意識はけっして実体ではない。折々にその説明は曖昧に変化するので、一種のエネルギーのようなものともとれるし、また一定の場所とも理解できるのだが、いずれにせよ意識の前にはっきりした姿を現すことはありえないのである。無意識はそこからの働きの結果や効果としてのみ語られうる。厳密に言えば無意識を説明する言葉はすべて仮構にすぎない。力として、存在として、あるいは空間としてイメージしてもそのすべてを拒絶するのである。いわばその存在がひとつの世界観であり解釈だといえるようなものであり、定義の言葉のパラドックスに依存している。意識が人間が主体であるためのよりどころだとしたら、無意識はまさにそのような人間の自立性への挑戦である。個人の主体性などというものが近代の幻想に過ぎないことを見抜いたのはフロイトが最初ではない。ポール・リクールは『フロイトを読む』のなかでマルクス、ニーチェ、フロイトについて次のように言っている。

しかしこの三人に共通な意図に遡ってみるなら、そこに見いだされるのは、まず意識を全体として、「虚偽」意識とみなそうとする決意である。そこにおいて、彼らは三人三様の仕方で、デカルト的懷疑の問題を再びとりあげ、その問題をデカルト主義の本拠にまでもちこんでくる。デカルト学派によって哲学的形成を受けた哲学者は、事物は疑わしく、それが見えるがままでないことを知っている。だが彼は、意識は意識自体が現れるままである、ということ疑ってみない。つまり意識において、意味と、意識の意味とは一致するのである。マルクス、ニーチェ、フロイト以後、われわれはそのことを疑うようになった。事物について懷疑を抱いたあとに、われわれは意識について疑いを抱きはじめたのである。<sup>3)</sup>

意識としての自己がりのままの自己に通暁している幻想を指摘している。主体が失われたなどと大げさに言っているわけではない。ただ全面的に自分をコントロールしうる主体などはじめからなかったということだろう。自分で意識できないものを自らの内部に抱え込んだ結果、

自己の統一が破綻したというよりも、むしろ主体というものとの関係づけることすら難しい無意識の圧倒的な勢いを設定することで、欲望や願望から主体を切り離し、制限を加え、意識は全能でなければならないという近代の重圧からある意味では自己を解放したのかもしれない。自らの内部に抱え込んでいる未知なるものがいったい誰のものなのか、という問いかけ自体が、知と所有の隠微な共謀を暗に指摘しているのだが、この理性を根拠にして世界を把握し、そしてそれを所有する近代市民社会の理念の行き詰まりはまさに統一性のある自我という観念の終焉でもある。

\*

夢の解釈という作業でフロイトが主張したことのなかで最も重要なことのひとつとして願望充足がある。無意識を源泉とする個人の秘かな欲望が、夢の中においてそのまゝのカタチで噴出すれば、それは夢見る本人の眠りを妨げる。そのため検閲という規制が働き、夢の潜在的な内容（夢思考）に歪曲という加工を施し、現にわれわれが見る顕在的な内容（夢内容）として自らを表現するというものである。一見もっともらしい論理のようだが、何とも奇妙な手続きで、そもそも眠りという行為そのものから生じる無意識の跋扈が眠りを妨げる力となるという展開に矛盾があることは一目瞭然である。またひとり人間の内部で、眠りを破壊するほどの根源的な願望に耐えられる機関と、それを検閲するものと、そしてそれを受け取ろうとする機能が混在しており、そのように複雑な構造のなかで複雑な手続きを経て伝達されねばならない願望の中身はどういうものになるのか。当然意識に上るのがはばかれるものだと思ってしまうのだが、フロイトの挙げている例がすべてそうとは言い切れない。むしろ何故この程度の願望がわざわざ検閲を受けねばならないのか首を傾げざるをえないものもある。願望すべてが夢に表現されるものでないとしても、夢に表現されるものすべてが意識にとってネガティブな側面をもつという論理には、夢とヒステリーを同一の現象、つまり夢もひとつの病の徴候としてみる見解と重なり合うものがある。夢を見ない人間はほとんどいないだろうから人間全員が病んでいるわけか。ある意味では人間は病んでいるかもしれないが、そうするとともに病気と健康などという区別自体に意味がなくなり、ヒステリーも病気ではなくなる。にわかに納得できない話である。精神的な外傷が抑圧されて、意識に上るのを拒み、そしてその抑圧がヒステリーを生むという。ところがそのヒステリーを取り除くには、無意識のトラウマが意識化、言語化されねばならないとしたら、これは錯綜した論理である。もともと意識に上るのを拒否した結果としての症状が、意識化されることで消滅するという奇怪な経過である。意識化

言語化というプロセスで当の人間の成熟と他者の関与が重要な要素として働くことをフロイトは強調したいのか。

夢の解釈は「夢の作業」を逆にたどっていくことである。論理構造としてはまず無意識があり、それが圧縮や移動、形象化等の検閲を通過するための歪曲過程、つまり夢の一次加工を経て、実際に見られる夢となる。さらにその夢が夢見た本人が語るといういわゆる二次加工（フロイト自身はこのような表現を使っていないが）を受けて、いわば客観的な夢、言葉に変えられた夢として分析の対象になる。厳密に言えばおそらく、夢見た本人が自ら意識するのが二次加工で、さらにそれを第三者に語る際に行うのが三次加工だと考えられるのだが、フロイトはそこまで細かく分類して論じてはいない。夢の解釈はこの言葉に変えられた夢から、そこに至るまでに加えられた歪曲、変形などのフィルターを順次はぎ取っていく、最終的には本体としての無意識に到達する試みである。到達した無意識はもちろん無意識本来の形で表現されることはない。そのようなものなどはじめから存在しないのだから。したがってそこで言われる無意識はあくまで比喩として提示される。逆説めいてくるが、無意識の解明は意識の極限でなされることになる。近代的理性の担い手としての意識が、その力の及ばない領域の存在に目が向けられることによって、自らの虚偽的性格が暴露されたことはすでに述べた。ほかならぬフロイトがそのような理性の刺客である。しかし注意してみれば、意識は無意識を意識言語に変換する装置を案出し、無意識との境界にまで接近し、その結果自らの限界を確認することで、その延命をはかっているともいえるのだ。無意識という謎の領域の存在がクローズアップされればされるほどに、それを意識の世界に迎え入れる働きも価値を増すことになるのである。そこに、謎としての世界が、その謎を解明しようとする知の情熱と巧緻を育んでいく関係を読みとめることは難しくない。こうしてみるとフロイトの思考方法がヨーロッパの伝統に連なっていることはすぐに理解できる。世界の構造は分からない、世界はありのままの姿を決して人間の前に現さないという前提から出発し、そのオリジナルなもの、ある場合は真理であり、また神でもあるような絶対的な存在を、なんとかしてわれわれの経験しうる表象に翻訳しようとしてきたのがヨーロッパの知的格闘の歴史である。プラトンという源流を遡るまでもなく、真実は隠されているという前提がまずあって、そのヴェールをはぎ取る作業が知的活動として意味を持つ。しかし立場を変えてみれば、そのような世界があって、それに対峙する人間の行為が正当化されるのではなく、人間の知的行為を意味あるものにするために、そのような世界が要請されたとも考えられ

る。真理やオリジナルなものが隠されているのではなく、謎を暴く知の働きを正当化するために、隠されているものを真理とし、オリジナルなものは謎でなければならないという論理構造である。謎を発見する手法のためには、まず謎が創造されなければならないのである。時間的、因果的論理としていずれが先かということはさして重要ではないだろう。奇妙な言い方だがそれは同時にいうか、一挙に進行するプロセスだろう。

フロイトの夢の解釈も同様の文脈に並べられるだろう。論理的展開としては、何よりもまず無意識が先にあり、いわば時間的な因果関係においての絶対的な先位権を主張し、原因としての無意識という地位を強調しているのだが、現実的に無意識が語られうるのは作用や働きの効果としてのみであり、その効果が目に見える形として、つまり夢という徴候として確認されて後初めて無意識もまた確認されるという仕組みなのである。出発点になる過去を決定するためには現在が絶対的に必要とされ、両者を結ぶ因果関係がそこで作られる。時間の連続性が逆から作り出され、後ろがあって初めて照らし出される前なのである。起源を創出しようという試みであり、この起源は思い出されて、物語られることによってしか表層に出てくることはない。夢の源泉としての無意識から生み出された夢思想がはじめて存在したのではなく、見た夢に夢を解釈する視線を向けたとたんに、そのようなものとして出現せざるをえないのだ。『夢判断』でフロイトは無意識を探るための徴としての夢を考察するうちに、夢そのものよりも、それを扱う手つき、考察の方法、テクニクの妙味にとりつかれていく。それはちょうど探偵が犯人そのものよりも、犯人を見いだす過程、犯人が隠そうとして痕跡を逆に探り出す手続きに魅せられていくのに似ている。

フロイトは人間の欲望が何ものにも先立つものと考え、その実現は文化や法、制度によって妨害され、抑圧されると考える。そのようないわば社会秩序を守るための人工的な衣装に人間は意識することなく慣れ親しみ、それを自然に身にまとい、結果として衣装がなおいっそう人間の欲望を押さえつけるのに力を貸してきたと考える。それゆえまさにこの衣装を剥がす行為こそ、ヨーロッパの文化と歴史を批判的に相対化するものであり、自らの知の価値を保証するものとなる。夢の読解は、そこに至るまでヨーロッパ文化が自然と野生に対して行使してきた抑圧と隠蔽工作を暴露することであり、それに力を注ぐフロイトの異常な情念のなかにヨーロッパ近代の行きづまりとこの野生の復権が読みとれるのである。

\*

無意識は意識を限界づけるのに、知の通用しない媒体を提示する。つまり意味不明のイメージを提供する。

「ほとんどの夢は、その当事者ににわかには理解されず、夢が意味を持つという命題はあからさまな反論を受ける可能性がある。夢見る人が夢の伝えるメッセージの意味を記録し損なうのがふつうだし、なんらかのメッセージが込められていることすら記録し損なうものだ。」<sup>10</sup>むしろ意味を理解できないから記録し損なうといった方が正しいだろう。もちろん意味が理解できないことは、意味がないことと同じではない。別の次元の問題である。検閲を通過させるために歪曲した結果、夢の伝えようとするものが分からなくなっているというのがフロイトの見解だが、これは夢が何らかの目的を持ったものという機能論にあまりにも囚われすぎているように見える。願望充足、抑圧、歪曲、検閲といった一連の夢形成の構想には、人間の社会制度をそのまま心の世界に持ち込んだ安直さが付きまとうのだ。人間社会の政治的葛藤が心の仕組みにまったく反映しないとは考えられないが、それでほとんどが解明できるとは納得しがたい。ライクロフトは夢の意味が理解できないのは、そこで有効な言語の質が覚醒時とは異なるせいであり、ランガーの定義を援用して覚醒時を論証的 (discursive)、夢のそれを非論証的記号体系 (non-discursive Symbolism) と呼んでいる。<sup>9</sup>繰り返しになるが、夢の内容が非合理だからといって、それが夢見る人間にとって非現実だということにはならない。非合理という判断は、あくまでも覚醒したときの視点からのもので、われわれは夢を見ているまさにそのときは、夢に納得している。リアリティは十分感じている。ただそれを目覚めてからの自分や他者にそのリアリティを伝える言葉をもっていないだけである。同様に非合理であったとしても、それが思考でないとはいえない。言語や理性に価値を置く文化では夢に現れるようなイメージや視覚映像を思考とは見なさない。絵画や音楽という限られた世界に、つまり芸術という制度にそのような思考を閉じこめ、それを一般に通用する合理性の範疇から隔離してきた。芸術は貶められてきたわけではないが、思考は文字言語によって獲得されるという圧倒的な固定観念の傍らで、人間の感情生活の一部を慎ましく支える役割に甘んじてきたのである。無意識を前にしての意識の不能は、そのように言語を操ることで世界に向き合い、近代世界の骨格を支えてきた合理的な自我の挫折であり、『夢判断』は夢を語りながら、新しい自我のあり方の可能性を模索しているとも考えられる。

出発点に立ちかえて、夢を解釈するというのは、夢が意味ある現象であることを前提とする。ここで意味というのはたとえば夢が単に生理的・肉体的現象で個体の生物学的な持続のために意味があるというようなことを言っているのではなく、何らかのメッセージ性をともなっているということである。メッセージには必ず発信者と

受信者が想定されねばならず、その間である事柄が伝達されるということは、つまりコミュニケーションが成り立つということはそれだけで同時に意味が生じたことになるのである。意味というのはそれ自体自立して絶対的にあるというものではなくて、必ずあるものにとって、あるいは誰かにとって意味があるといえるものだ。それでは夢は誰から誰に発せられたものなのか。夢の発信者はこれは自己以外考えられない。もちろん集合的な無意識、自己を越えたところから発するメッセージが個人の夢として出現するというようなユングの主張もあるが、それは結果としてそういうものもありうるということであって、すべての夢がそうであるはずもなく、夢の解釈がもともと精神分析という治療行為の一環として案出されたことを思えば、個人の生のもつ個別性と深く関与しているものである。自己から発するものがそれを見つめる自己に意味を持たないわけではないのである。たとえば身の回りにある石ころや塵芥がある人間にとって意味があるかどうかは、これは考え方のもちようによってどうにでも解釈できるものだ。石ころを意味ある存在にする絶対的な根拠、つまり受取る側の人間との否定しがたい関係などないからである。しかし夢は違う。夢は〈私〉という空間に出現し、それを〈私〉が経験しているのだから。逆説的だが、こう考えてくると、いわゆる現実と夢を比べれば、確実に意味のあるのはむしろ夢の方だともいえるのである。夢は自己から自己に発せられたものである。

\*

フロイトの願望理論は夢のもつ表現的な機能ばかりを重要視していた。検閲の忌避、歪曲などの発想はすべて表現者の側から来るものである。メッセージが理解されるというのは発信者と受信者が同じコードをよりどころにしているということだ。フロイトの考えでは、無意識から発する願望は自らの意図を隠そうとしながら、同時にその存在を知らせるサインを送っていることになる。これは隠したい相手と、知らせたい相手が別々にいることを明確に示しているもので、超自我や前意識などの中間領域をもうけて心の世界を分割したのはこのことによる。その根底にあるのは無意識の破壊的エネルギーの噴出とその抑圧、馴制という対立構造への信念である。意識と無意識は、徹底して快楽を追求する根元の欲望の倫理的意味をめぐって対立しているのであり、その次元では同じコードの上にあるのだが、その欲望の内容が伝達されるという次元では別のコードに属している。夢が不可解なのはそこからくるのだが、同時にそのコードさへ正しく理解すれば、つまり夢の変換装置を掌握し、夢を的確に解釈しさえすれば、夢は意識の言語で読み解けると確信しているのだ。しかし実際にそうなのだろうか。

読み解かれたという夢、たとえばフロイトの自己分析の精華とも評価される「イルマの夢」を読めば、精緻で目配りの十分効いた読解には目を瞠るものがあるのだが、そこで感じる驚きは夢が正しく読み解かれているという実感から来るものではなく、ある出来事から言語的かつ心理的な連想を最大限にまで引き出している事例を前にしたものである。いわば意識言語の精細な力業を見ているようで、いったん引導を渡された意識の権力が、こともあろうにフロイトによって復権を果たしているような奇妙な光景なのである。フロイトは無意識の力を前面に出しながら、その無意識から力を吸引するようにして意識の表現力を拡大し、結果的に対立の図式を先鋭化しているのである。

それにしても夢はほんとうに不可解なものだろうか。夢が不可解になるのは、目覚めの直後にその夢に因果的な繋がりを見つけだそうとしたときであり、第三者にそれを語ろうとしたときであって、夢を見ているときではない。第三者や意識的な自己への橋渡しとして夢の二次加工が施されていることになっているが、よく考えればこの作業は夢を表現する立場からのものではなくて、夢を発見する〈意識〉の方からのアプローチであり、夢を理解するためのプロセスである。このあたり「夢の作業」という用語についても夢を発するものと受け取るものの視点が混用されているといえる。夢は少なくとも夢のなかでは十分に理解されている。理解されているという言葉が的確でないなら、現実感をもって受け入れられているといってもよい。フロイトは夢見る時を覚醒時とは厳密に区別し、それを対立的に捉えることで、自我の構造自体も欲望の完遂とその抑止という分裂と対立の図式に置き換えている。しかしわれわれの自我はそれほど対立的に分裂し向かい合っているのか。夢という空間においては夢の意味は確実に伝達されているのではないか。つまり夢のイメージの意味は、フロイトが考えているような〈意識〉に対しては不可解ではあるが、夢のメッセージの受信者はもともとそのような狭隘な自己意識、つまり自分以外の第三者を意識した自己ではない。夢は個人的で、私的でそしてただ自分のみ向けられたコミュニケーションであり、他者とその意味を分かち合う必要がない現象であり、その意味を獲得するのに公的な文法を要する言語は必要ないのである。その意味では夢はわれわれが日常、ごく自然に行っている想像行為と同質なのである。想像は必ずしも論理的な言語の管轄にあるわけではない。夢のごとく視覚的なイメージに頼ることもあれば、才能によっては聴覚や嗅覚に拠る場合もある。しかしそうであっても思考であることには違いはない。夢においてたしかにいわゆる意識的な言語の力は弱められているのだろうが、思考それ自体は決して休止している

わけではないのだ。そしてこの思考は絶えず自己自身へメッセージを送り続けているのである。

非論理的な言語の領域は意識の支配する論理的な言語と対立するのではなく、一人の人間の思考をそれぞれに支える機能をもつ。しかしヨーロッパ近代の知的営みの歴史のなかで、あまりにも論理的なるものへ重心を置かれてきたが故に歪められた自我の構造が、フロイトをして、非合理的なものが圧迫を受けているという観点から夢を解釈させることになったのだろう。非論理的領域からの絶え間ないメッセージは次元を異にする意識へ向けられたものではなく、それを受け取ることによって、まさにそのようなメッセージを受け取ることでできる機関としての存在を証明するもので、それは夢によって復権するのである。この機関が統一的な自己だといいきれるものではないが、覚醒時の〈自我〉が拒絶し、あるいは拒絶された記号世界と通じているということでは、理性のくびきで動きがとれなくなった近代の自己意識の弱点を補うものである。このように夢を見るという行為が〈意識〉とは別の次元での〈自己〉の創造に関わるものだとすれば、夢の解釈は、夢見る人が一見あらゆる記号体系から切り離された自らの夢を自分自身の総体との間に関係を確立させようとする試みだと考えられる。

＝註＝

使用した『夢判断』のテキストは Sigmund Freud : Studienausgabe in zehn Bänden. Hrsg. von Alexander Mitscherlich, Angela Richards, James Strachey. Frankfurt am Main (S. Fischer Verlag) 1972, Bd. II Die Traumdeutung.

- 1) W. M. ジョーンストン (井上修一, 岩切正介, 林部圭一訳) 『ウィーン精神』みすず書房 1986年 338頁以下参照
- 2) R. Schafer は精神分析が人間の内部をまったく自然科学の対象のように語る傾向に異議を申し立て、「行為言語」を用いることを提唱している。それによれば行為というのはある方向性をもった人間の態度 (Verhalten) 全体をいうのであって、その考え方にならえば、「考える」こと、「話す」こと、また「何も言わない」ことも何かを「思い出す」ことも行為と言うことになる。だとするとたとえば夢という現象も「夢」を「見る」という風な観点から分析するのではなく、「考える」や「思い出す」「話す」と同じように「夢を見る」という人間一般の普通の行為と見なすことができるというのである。Vgl. : Roy Schafer : Eine neue Sprache für die Psychoanalyse. übers. von Wolfgang Krege. Stuttgart 1982 S.70 ff.
- 3) P. リクール『フロイトを読む』久米博訳 新曜社 1982年 38頁
- 4) C. Rycroft : The Innocence of Dreams. London 1996 p.47
- 5) Ibid., p. 18